

2013年10月6日 主日礼拝説教（要約）

聖書 テサロニケの信徒への手紙一 1章2～10節

「主の言葉が響き出る教会」

日本キリスト教会鶴見教会牧師 高松牧人

御言葉の種がまかれ、主イエス・キリストを信じる人たちが集められ、主を宣べ伝える教会が建てられ、さらにそこに私たちが招かれているということ、それは本当に驚くべき神の御業です。教会建設79周年の記念日を覚えて、テサロニケの信徒への手紙一から御言葉に聴きたいと思います。

この手紙は、聖書の中に残されているパウロの手紙の中でも最初のものだと言われていいます。紀元50年ないし51年頃コリントから書き送られたものと考えられています。パウロがテサロニケで宣教したのは、第2伝道旅行においてですが、使徒言行録17章によると、彼はフィリピでの活動の後、シルワノやテモテとともにこの町に来て、ユダヤ人の会堂を拠点に福音を説き、主を信じる人たちが起こされていきました。しかし、間もなく敵対者たちによって引き起こされた騒動のために、ここを去らなければならなくなりました。後のことが心配でしかたなかったパウロですが、その後の様子を見てきたテモテの報告はとてもよいものでした。テサロニケの教会は、しっかりとキリストの福音に踏みとどまり、苦しみや困難にもめげずに歩んでいるというのです。そのことを知ったパウロは喜びと感謝の内にこの手紙を書き送り、彼らを励ましているのです。まだ生まれたばかりの、牧師もいない、会堂もなければ、制度や組織も整っていない教会です。けれども、テサロニケ教会の人々は実に生き生きと信仰生活をし、福音を証ししていたのです。パウロが書いている次の言葉がそのことを伝えてくれています。「あなたがたが信仰によって働き、愛のために労苦し、また、わたしたちの主イエス・キリストに対する希望をもって忍耐していることを、わたしたちは絶えず父である神の御前で心に留めているのです」（3節）。

信仰、愛、希望とは、神が主イエス・キリストによって与えてくださる大きな恵みの賜物ですが、そこに「働き」、「労苦し」、「忍耐する」という言葉がついています。この教会においては、主の恵みが観念的・抽象的に信じられているというのではなく、その恵みが彼らの日々の生活の中に根をおろし、实际的・具体的に日々の歩みを支えていたことを表しています。主が私たちに与えてくださった信仰と愛と希望のゆえに、私たちが喜んで、主と隣人のために働き、労苦し、忍耐する、そこに教会の歴史は始まります。主は私たちを用いて教会を建ててくださいます。私たちも、数多くの先輩たちの信仰の働き、愛の労苦、望みの忍耐によって、今日ここに招かれているのです。そして、教会建設を記念するとは、私たちも彼らに倣って生きる決意を新たにすることなのです。

信仰と愛と希望が、日々の生活の中で豊かに実を結んでいるテサロニケの教会の生き生きとした歩みを表しているなおいくつかのすばらしい表現を、パウロの言葉の中から見ていきたいと思います。

テサロニケの人々は、「ひどい苦しみの中で聖霊による喜びをもって御言葉を受け入れた」(6節)とあります。環境がよかったからではないのです。彼らが悲壮な決意で何かを成し遂げたのでもないのです。聖霊の導きのもとに、「子供のように神の国を受け入れた」のです(マルコ10:14)。

また、テサロニケの教会の人々は、「わたしたちに倣う者、そして主に倣う者となり、マケドニア州とアカイア州にいるすべての信者の模範になるに至った」(6~7節)とあります。信仰生活は、ただ言葉や知識を学んで、自分で考えてということでは始まりません。まねるということがどうしても必要です。考えてみれば、お祈り一つ、私たちは自分で考え出したのではありません。先輩たちの祈りを真似し、ならって祈り始めたのです。そして、使徒たちに倣い、主に倣う者となった彼らの生き方がこんどは、周囲の人々の模範になっていきました。模範と訳されているテュポスというギリシア語は英語のタイプにあたる言葉で形とか原型という意味です。つまり、すぐく立派で模範的だということではなく、キリストの恵みに生かされているなあと思われる姿、形がそこにあるということです。キリストの福音を映し出す生き方を身につけているということです。私たちも、教会生活において信仰の先輩たちや仲間たちから、キリストに倣って生きる姿や形を見習い、まねていきたいものです。

さらに、8節には「主の言葉があなたがたのところから出て・・・響き渡った」と書かれています。「響き渡った」という動詞は、こだまとか残響を意味するエコーという文字を含む言葉です。響き渡るというのは、テサロニケの教会がただ御言葉を情報として発信しているとか、知識を教えているというのではなく、彼らの生活を通して伝えられていたということです。バイオリンでもギターでも、弦が発する音は胴の部分で共鳴して豊かな音色となって伝えられる。同じように、福音の言葉はただ誰かが正しく説教しただけではだめで、御言葉を受けとめる群れがあり、それを聞く一人一人がそれに応えて生きているところで響きわたるのである。その響きが人々の心に届き、揺り動かすのです。パウロはすでにおらず、傑出した指導者や有名な説教者がいたわけでもありません。けれども、福音を共鳴させ、響き渡らせる共同体がそこに生まれていたのです。彼らが信仰と愛と希望をもって、働き労苦し忍耐する姿が、それを見聞きした人々に感銘を与え、御言葉と共に言い広められていたのです。まさにそこに伝道する教会が生まれていたのです。

どんなに小さく未熟で欠け多い群れであっても、御言葉が語られ聴かれているならば、そこから私たちの集まりを通して御言葉が響き始めます。主が私たちを用いて御業を進めてくださいます。主が、私たちの教会を鶴見の地においていよいよ御言葉が響き出る群れとして養い育ててくださることを祈り願いつつ、共に歩んでいきたいものです。